

BOOK REVIEW

作業療法カウンセリング

本書は作業的存在である対象者の「気づき」と「意欲」を引き出す技法集である。

人は誰でも、「より意味のある作業で満たされた日常生活を主体的に創り続ける」のが普通である。作業療法の対象者は何らかの原因でそれができなくなった方々であり、再び満足できる日常生活を創り続ける軌道に乗るよう支援する。この支援を実践するにあたっては、「自分にとって意味のある作業」についての対象者の「気づき」と、それをやってみようという「意欲」を引き出す作業療法士の技術が求められる。本書では、その技術がふんだんに紹介されている。

カウンセリングという本書のタイトルから、私は何となくうさんくさいイメージを持った。しかし、それは数ページを手繰ったところで消え去り、著者の熱い思いが伝わってきた。編著の大嶋氏は人に明るい予想を抱かせ、その気にさせる天才である。私や同僚も良い意味で大嶋氏の術中にはまっているので断言できる。「このスキルを作業療法士に伝えたい」、本書からそのような意図を感じた。

作業に焦点を当てた作業療法実践では、できるようになりたい作業を対象者とともに明確にするプロセスが必須である。しかし、このプロセスを諦め、作業療法士側が一方的に必要と決めた動作訓練やADL訓練を勧める事例が多いと大嶋氏は指摘して

いる。そして、カウンセリングがこの状況を打開する強力な技法になるという。

作業療法カウンセリングの定義について、本書では『作業療法を円滑に進めるために、作業的存在である対象者の「気づき」と「意欲」を引き出し、意味のある活動へと導き、主体的な生活が営めるよう援助する双方向的な一連の意思疎通』と説明している。そのうえで、各種のカウンセリング技法を取り入れた作業療法の具体例や実践例を多数例示している。私はカウンセリングに詳しくないため言及を控えるが、少なくとも私が対象者とコミュニケーションをとる際に気を付けている点や意識している点と同じと思える記述がここかしこに見られ、わかりやすく思えた。また、趣が異なるが、職場改革事例を紹介した第3部—実践編「職場マネジメント」(中澤氏)を楽しく拝見した。

注文を一つ付けさせていただけるなら、本書の統一感を指摘したい。多数の精鋭執筆者の表現を生かす利点を採用したことは理解できるが、本書を1ページ目から順に読むと、用語の概念や文章のリズムは揺らぎを感じる。読みやすい方法としては、まず大嶋氏執筆の項を最後まで読み進めて氏のMy OT Theoryを楽しみ、その後で共著者の項に目を通すと良いと思う。

当たり前の作業療法を効果的に実践したい方にお薦めの一冊である。



●大嶋伸雄=編著

(B5/352頁/
4,500円+税/三輪書店/2020年)

評者

小林法一

東京都立大学大学院人間健康科学研究科 教授、作業療法士